

A photograph of two men standing outdoors. The man on the left is older, with grey hair and glasses, wearing a dark jacket and light-colored trousers. The man on the right is younger, wearing a white head covering, a dark long-sleeved shirt, and dark pants. They are standing in front of a traditional Japanese building with a thatched roof. The background shows trees and a clear sky.

新・農業経営者ルポ／第107回

**原発事故をきっかけに、
再び風土とともに
歩み出した農村経営者**

茨城県つくば市で原木シイタケを生産する(有)なかのきのこ園の代表・飯泉孝司(65)は、2年前に経営委譲を考えていた矢先、人生における最大の試験に直面する。東日本大震災に伴う東京電力の原発事故である。東日本一帯の森林が放射能に汚染され、全面的に頼っていた福島県からの原木の供給はストップ。さらに販売も急激に落ち込むようになった。そんな逆境の中にあつて、むしろ農村経営者として再び周囲の先頭に立ち、これまで限らない恵みを与えてくれた里山を取り戻す活動に乗り出した。

撮影・取材・文／昆吉則・窪田新之助

原木を通して全国に広がる 福島への悲しみ

山が泣いているようだった。

阿武隈山系にある福島県田村市の旧都路村。ここは国内最大の原木の生産地である。ただ、今となつては、「そうであった」と言うべきなのかもしれない。

旧都路村では、専門の集団が薪炭材としてクヌギやナラを植林してきた。それらの需要が戦後の燃料革命で減っていくのに合わせ、キノコの原木として供給を開始する。

やがて、県境を越えて全国に出荷される原木の4割を、旧都路村を中心とする福島県産が占めるまでに至る。それが2011年3月に東日本大震災に伴って起きた東京電力の原発事故をきっかけに、樹も土壌も汚染され、人の手が入らない山となった。

筆者が初めて訪れたのは同年10

月。旧都路村の一部が福島第一原発から20km圏内の「警戒区域」(当時)に当たるため、そこから先への立ち入りを厳しく制限するバリケードがまだ張られていた時である。

周囲にある里山を向こうに望むと、木々の頭がきれいにそろつていた。ふくしま中央森林組合の吉田昭一参事に案内してもらつて里山に足を踏み入れれば、静寂の中で木々が不気味なほどに美しく、整然として立っている。いずれの幹もほぼ同じような太さ。それも緻密に計算された間隔で生えているのだった。

福島産の原木が望まれるのは、シイタケの生産者が手で扱うのにちょうど良い太さや重さであること。それから真つ直ぐなので、機械で植菌するのに向いている。つまり、大規模農家からの需要が強い。

原木を供給する里山づくりの歴史とともに歩んできた吉田が、とても悔しそうにこぼした。

「これだけの山をつくるのに40年以上かかった。これを取り戻すのは、それ以上の年月がかかるということ」

海原のように広がる山々。その一角に、これだけ人の管理が行き届いているのは、職人の技と心が込められているからだと感じた。だからこそ、放射能に汚染されてしまったために、原木に利用されることなく伐採される運命の木々、そして里山そのものが悲しんでいるように思えた。

その悲しみや痛みは広く全国に及ぶ。福島の里山は原木を通して全国とつながっている。なかでも茨城県つくば市にあつて、原木シイタケの生産規模で国内最大級の(有)なかのきのこ園は、福島から最も恩恵を受けてきた農業経営体といえるだろう。ピーク時で年間に23万本を植菌した、そのほぼすべての原木を福島に頼ってきたからだ。

その分だけ原発事故による影響は大きい。福島産原木の代わりを求めたため全国を駆け回つたが、大震災の年には13万本しか調達できなかつた。昨年もシイタケ自体の販売不振があつて、植菌するのは20万本にとどまる。

原発事故の賠償請求をするため、飯泉が代表になつて設立した原木シ



(有)なかのきのこ園 代表

飯泉孝司

茨城県つくば市

いづみ・たかし●1948年4月生まれ。高校を卒業後、公益財団法人農民教育協会・鯉沼学園農業栄養専門学校(茨城県水戸市)に入学。19歳で卒業後、実家で就農。1999年、原木シイタケの生産と加工、販売を手掛ける(有)なかのきのこ園(資本金300万円)を設立。植菌実績は2010年度は22万2000本。11年度は13万本に減つたが、12年度は20万本まで持ち直す。家族は妻、息子、娘2人。

原発事故をきっかけに、再び風土とともに歩み出した農村経営者

イタケの生産者による東日本原木しいたけ協議会。その会員370人の多くが栽培を中断し、賠償金をもらっただけの日々を過ごしているという。

飯泉は主張する。

「そもそも原木は菌床に押されているんですね。いまやシイタケ生産量の2割ほどですから。8割は菌床なの。そこに原発事故があって、このままでは味も香りもすばらしい原木シイタケが廃れてしまう。次の世代を担う若い生産者のために、まずは里山を再生しないとけない。それが私たち世代の役目なんです」

この発言の根底には、原木もそこから発生してくるシイタケも、里山に対する人間の長い営みの中から生まれてくる産物という強い認識がある。そのことを身に染みて分かっている彼自身もまた、雑木林が広がる風土のもとに生まれ、そこに抱かれるようにして育ってきた人物である。

おやじの経営から脱皮する

飯泉は19歳で公益財団法人・農民教育協会 鯉湖学園農業栄養専門学校（茨城県水戸市）を卒業後、谷田部町（現・つくば市）にある実家へ就農する。

「一般企業への就職は考えなかった。僕らの世代では農家の長男はうちを継ぐもんだったからね」

当時、父親は雑木林を開墾し、そこでもつばらクリを作っていた。それが飯泉の代になって原木シイタケを手掛けるようになったのは、近隣にある叔母の家でその栽培を見たのがきっかけ。自分のところにも先祖から受け継ぎ、子どもの頃から慣れ親しんだ雑木林がある。「それを伐採してやってみよう」と思い立った。

まずは原木3000本から取り掛かった。ハウスを建て、暖房機を導入し、見よう見まねで原木シイタケを育て始めた。そんな姿を見ていた友人たち4人も加わり、原木シイタケの栽培を研究する会をつくる。

雑誌『農業いばらき』に掲載された22歳のころの記事がある。『どっしり』と貫禄がある今とは違って、細面の『すらっ』とした姿で仲間とともに写っている。

「おれたちのグループは、シイタケつくりをやるうとする者が、自然と集まってできたことが特徴なんだ」というこの仲間たちは、楽しく金をとろう。ほかの人たちに負けない。人一倍あそぼうという、三つの Motto をかかえて、ドライブに、登山に、スキーに、またはボーリングな



1 原木に植菌用の種駒を打ち込むための穴を空ける機械。福島県産のように、まっすぐとした原木ほど扱いやすい。
2,3 ハウスの間にも内部にも、原木の運搬車が走るレールが敷いてある。運搬車がハウスから出てきた時に車と接触するのを避けるため、「止まれ」の標識を掲げている。
4 シイタケの芽を出すため、原木を浸漬する。



5



- 5 なかのきのこ園の広大な敷地に並ぶハウス群。
 6 予約制のバーベキューハウス。富士山の溶岩から作った焼き石で新鮮な原木シイタケを味わえる。
 7 植菌したシイタケの保管場所。日よけのため、よしずをかけている。
 8 飯泉とその家族。後ろは築100年という自宅。



8



6

どで、心のつながりを深めながら、出かせぎをしない農業、おやじの経営から脱皮した農業経営を目ざして・・・と張りきっている。ことしの春からは、それぞれが百本くらいづつのホダ木を出し合って、谷田部に合ったシイタケづくりの研究もやっていくという、このヤングパワーたちは、一人五万本くらいのホダ木をもち、仲間を二十人ぐらいにふやして、シイタケといえは谷田部といわれるくらいまでに発展させたいと意気込んでいる。

「おやじの経営から脱皮した農業経営をめざして」「シイタケといえは谷田部といわれるくらいまで発展させたい」。そうした夢を持ちながら、飯泉はあくなき挑戦で経営を大きく成長させていく。最もいい例は、今や当たり前になっている周年出荷を実現したことである。

シイタケの芽を出すには水に浸けた後、気温20度以下の条件に置く必要がある。このため、夏場であれば発芽させられないというのは常識であった。それを浸水後に中古のクーラーで2日間冷してみたところ、見事に芽が出た。

当時、家庭はおろかオフィスにもクーラーが設置されることなどない時代。買ってきた中古品は、国産は

なかったので外国製。価格は5万円、現在の感覚からすれば50万円はするはずだという。それに電気代も馬鹿にならない。それでも挑戦できたのは、「親父の理解があったから。好きなようにやらせてくれたからね」という。ただ、挑戦した甲斐はあった。

「今じゃ考えられない値段で売りましたよ。東一に出荷したら、100g1000円でしたからね。100gというのは、わずか6個ですよ」。そんな景気のいい話を嗅ぎ付けたのか、周りではシイタケを作る農家が増えていく。30歳を迎えるころには、自身を含め25人で生産組合を組織するまでになっていた。この時の売り上げは全員で1億円。その1割を飯泉が占めていた。

さらに、市場に出荷するうちに、自分たちで値段が決められないことに疑問を持つようになる。ちょうど妹が生協の組合員だったので、生協に出荷して自分たちで値段をつけることを思い付いた。

「でも、できたばかりの生協を見に行くと、プレハブ小屋なんですよね。売った方がいいが、金をくれるのかと(笑)。それでも、やがて生協の組合員が増えるにつれ、うちの生産量もどんどん大きくなっていきました」。規模を拡大できたのは、一帯が平

原発事故をきっかけに、再び風土とともに歩み出した農村経営者

地林であることも貢献している。敷地面積4.5haに広がるハウスの間にはレールが敷いてある。トロッコで原木を運ぶためだ。山間地のホダ場ではありえない光景である。

仲間とともに販路を築くことで大きくしてきた、JAつくば市谷田部産直部会きのこ部会の売り上げは年間3億円強に及ぶ。

飯泉が20代の頃に描いた夢。仲間たちとともに40年以上かけて作り続ける中で、谷田部（現・つくば市）は確かに原木シイタケの一大産地になっていた。

困難にある中であえて挑戦する

同社に昨年、それまで都内で接客業をしていた娘のひろみ（31）が加わった。風評被害などで生シイタケが売りにくくなっている中で、前職での経験をいかして、これから加工品を開発していきたい。そのことで自社だけでなく、茨城県の原木シイタケの生産を振興したいという。そんな彼女が地元に戻ってきた頃、昔からの友人に父親を尊敬される言葉ももらった。

「お父さん、すごいね。いつの間にかこんなに従業員を増やしたの」
そういえば、ひろみが子どもの頃には家族だけで経営していた。家の

そばには、小さな作業場があるだけだった。それが今や4.5haという敷地内にハウス群が並び立つ。経営が大きくなるにつれ、従業員は26人に増加。また、原木シイタケで生計を立てたいと志願する若い研修生を抱える。さらにパーベキューができる施設をつくり、観光客が来るようになった。家族としてあまりに近くにいたから、気が付かなかったのだ。

「友人に言われて、ああそうか、父はずっと作り続けているんだなとよく分かったです。事務所や休憩所、ハウスも。こんなに大きくすることは相当な労力だったんだらうなと。私が父の年齢になった時に、これだけのことをできているのかと思うと、とてもすごいことだと感じます」

そんな娘の発言に対し、飯泉は一言。「私は恵まれているんですね」

確かに話を聞く限り、友人や家族のほか、広大な雑木林の遺産や時代状況にも恵まれていたといえるのかもしれない。だが、ひろみが付け加えた。

「そうかもしれないけど、恵まれていてもできない人はいる。やっぱり、自分にやる気持ちがあったからじゃないの」

その通りだと感じる。逆境にあつたとしても、挑み続けられる人間で



9 ダイコンの洗浄機を改造した原木の除染機。飯泉さんは除染の時間を長くするため、2台をつないで洗浄工程を伸ばしている。10 原木に水を噴射して、原木の表面にある放射性セシウムを洗い落とす。11 地下水を使った排水は濾過し、国の指標値以下にしている。12 地下水をくみ上げるために設置したボーリング装置。13 トレーサビリティのため、色によって原木の産地が分かるシールを1本ごとに張っている。放射性セシウムが指標値を上回るなどの問題が発生した際に備える。

14



ある。だから原発事故にあって、再び自身を奮い立たせることになった。

彼は昨年から、里山の再生とそれに関わる人材を育てるための組織づくりに取り掛かっている。生産者や生協のほか、個人的に付き合いのある林業関係者や学者、県議会議員、さらに東電の社員までを自分の事務所に集めて会合を重ねてきた。そして6月7日、待望のNPO（特定非営利活動）法人・里山再生と安全な食を考える会を発足させる予定である。

この組織は森林を除染して、そこ

にクスギやナラを植え、原木として伐採する。また、その副産物で木質系バイオマスの発電をしたり、里山を拠点とするグリーンツーリズムで観光客を呼び込んだりする。

手始めに近所の友人が所有する雑木林を、原木を取るための里山に変えていく。藪となっているので、草刈りをしているところだ。

「もちろん東電の社員にも協力を求めるつもりです。汗をかかないと、本当のことはわからないですから」

ここでモデルケースができれば、県内だけでなく県外にも同様の活動を広げていきたいと考えている。もちろん、これまで多大なる恵みを与え続けてくれた福島も視野に入れて

いる。

こうした場所が里山として生まれ変わり、原木として木が切りだされるのは早くとも20年は先になる。飯泉の年齢を考えれば、これからやろうとするのは、個人としての経営を越えたところにあるといえるだろう。それでも先頭に立って取り仕切るのには、彼自身が言うように、風土の中で生き、生かされてきたことを感謝しているからである。原木を産出する里山は人の手を加えながら、後世に引き継ぐべきものでもあるということだ。そうした反省を福島の原発事故は論じている。

飯泉は周りの若い人たちにこう言っている。「賠償金は生活に使うのではなく、すべて将来の経営に投資しろ」。それから「たくさんの人を集める」とも。

彼らにとっては畑ともいえる原木は原発事故で一瞬にして損なわれた。だが、農村経営者たる彼のもとに多くの人が集まってくる限り、原木シイタケの生産者たちはこの逆境を乗り越えられるはずだ。そこに飯泉はこれまでよりも多くの可能性を秘めた未来をみている。

（文中敬称略）

15



14 なかのきのこの園に隣接する雑木林。ここを原木が取れる里山にする。東京電力の社員にも下草刈りや植林の手伝いに来てもらうよう呼びかける予定。15 飯泉とともに里山再生に取り組む大木貴博。こうした若い生産者のために、原木を産出する里山を作っていく。16 原木シイタケの生産振興のために話し合う関係者たち。

16

